グリンワーズの災厄の乙女【第二部・王都編】

青柳朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
グリンワーズの災厄の乙女【第二部・王都編】

【Ｎコード】
Ｎ４３５９Ｈ

【作者名】
青柳朔

【あらすじ】
グリンワーズの森から抜け出し、旅立ったレギオンとマリーツィア。王都を訪れた二人は旅支度を整えるためにしばらく滞在することにしたが、『災厄の乙女』であるマリーツィアが安心して泊まれる宿があるわけがなく――レギオンにはなにやら策があるようで？

1：君のてのひら（前書き）

こちらは『グリンワーズの災厄の乙女』の第二部になります。単品でも読めるように配慮しておりますが、第一部をお読みいただけるとより楽しんでいただけると思います。

1：君のてのひら

ずっと、世界の終わりを待ち望んでいた。
深い深い森の奥で。
自分の死と共に訪れる、この小さな世界の終焉を。

死ぬまで出ることはないだろうと思っていたあのグリンワーズの森の外に、私は今立っていた。自分とは無縁だとさえ考えていた王都のにぎわいの中の一部となって、拍子抜けするくらい周囲の目に怯えることなく堂々と歩いている。
はぐれないようにと隣を歩くレギオンのマントの裾を握り締める。彼は騒がしい人混みに慣れているのか、すたすたと迷いなく歩いていた。
「ねぇ、これからどうするの？　どの国にいくの？」
足の速いレギオンに合わせると私は自然と小走りになった。身長差のある彼を見上げて問うと、レギオンはちらりとこちらを見た後で落ちかけていた私のフードを片手で直した。
「気が早いな。本格的な旅支度をするのにしばらく王都に留まるさ」
予想外のレギオンの返答に私はぽかんと口を開けた。
「え、だって……泊まれる宿あるの？　私――」
災厄の乙女なのに、という言葉は素早く飛び出してきたレギオンの手によって声にはならなかった。
「普通の宿は無理だろうな。だが他につてがある」
「つて？」
「いいから黙ってついて来い。おまえが口を開いてると不安で仕方ない」
ふぅ、と呆れたようにため息がレギオンの口から零れる。
その瞬間に胸の中に言いようのない不安が膨れたけれど、それは

すぐにしぼんで消えた。きゅ、とマントの裾を強く握りしめて私はレギオンの言う通りにただ黙りこんだ。

市場のにぎわいを抜け、裏へ裏へと入っていくと、そこはほのかに甘く芳しい香りのする場所だった。人らしい人の姿はあまり無く、店らしき建物の扉は昼過ぎだというのに閉ざされたままだ。

異様な空気に何故か不快感が湧いてくる。

「――――レギオン、ここ、何？」

マントの裾をくいっとひっぱって問うと、レギオンは少し困ったような顔をして見下ろしてきた。

「……歓楽街だな」

知らない単語に首を傾げた。グリンワーズの森の外へ出たことのない私には知らない単語が多い。王都へ辿り着くまでも何度もレギオンに問いかけた。

さらに問い詰めようと口を開いた時だった。

「あらぁ？　もしかしてレギオン？」

驚いたような、からかうようなそんな感じの若い女の声が聞こえ、私もレギオンも声が聞こえた方へと振り返る。

人気のない道の真ん中で、薄手の服でまるでむき出しの肩を見せびらかすような姿の女性がこちらに歩み寄ってきた。

「ああ、ラナか」

レギオンが何の感慨もなくぽつりと呟く。知りあいなのだろうか、と私はレギオンを見上げた。

「久しぶりじゃない。全然来ないと思ったら……こんな可愛い子を捕まえてたの？」

ラナという女性は白っぽい灰色の髪に青みがかった深い緑色の瞳をしていた。どことなく感じた違和感は、胸の中で疑問としてひっかかった。

「馬鹿言うな。マダムは館か？　部屋を借りたいんだが」
茶化すような口調にまるで動じることなくレギオンは真面目くさった顔で問いかける。
「色気のない男ね、相変わらず。娼館で女も買わずに過ごそうなんてそうそう許されることじゃないわよ？」
上手くない雰囲気に不安になり、レギオンを見上げる。しかし彼はこの状況で勝ち誇ったように笑っていた。
「……マダムに会わせてくれ。たぶん、俺の要望は聞き入れられる」
不敵な笑みを浮かべるレギオンに、女の人――ラナさんも不思議そうに首を傾げていた。私は頭上で飛び交ったいくつもの知らない単語のせいでまるで状況が掴めない。
不安を隠さずに見つめている私に気がついたレギオンは柔らかく微笑んで頭を撫でてくる。
「行くぞ」
そう言いながら差し出された手に、当然のように自分の手を重ねた。マントの裾よりずっと温かいぬくもりに、私がほっとしたことなんてこの男は気づいているんだろうか。

ラナさんを先頭にして向かった先は館という言葉がまさしく似合う大きな建物だった。レンガ造りの壁には蔦が這っている。その様子はグリンワーズで暮らしていた塔と変わらないはずなのに――古びた印象を持たせることなく、むしろ重厚な雰囲気をより一層濃くしているようだ。
「どうぞ。準備中なんだけどね。マダム！　お客様！！」
扉を開けると花のように甘い香りが漂った。館の中は外見に反することなく豪華絢爛だ。真紅の絨毯に、品の良い家具、埃一つないように全てに行きとどいた空間だ。

その美しさに見惚れていると、ばたばたと艶やかな黒髪の中年の女性が慌ただしく駆けつけてきた。
「なんだいラナ。騒々しいね。店はまだ開かないだろ！」
少し苛立ったように話しながらラナさんを見て――そしてこちらを見た。
「店のお客さんじゃないよ。マダム」
ラナはそう言いながらレギオンを指差した。マダムは目を丸くしてレギオンを見ている。
「久しぶりだな」
レギオンが苦笑しながら挨拶すると、マダムの表情が柔らかくなった。
「久しぶりじゃあないか！　前に仕事でうちに居ついた時以来かい？　騎士団を辞めたって風の噂で聞いてだけどねぇ、いや、教官をやってるんだったかい？」
「教官も辞めたよ。今日は少し個人的な頼みで来た」
レギオンが小さく「マリーツィア」と呼んだ。手を繋いだままだったが、少しだけレギオンの後ろに隠れるようにしていた私を前に出す。
「フードを」
はずせ、と言われて困惑した。そのままの顔でレギオンを見上げると柔らかく「大丈夫」とレギオンは笑った。
ずっとフードをかぶって隠していたのは『災厄の乙女』の証たる真っ白な髪と――深い緑の瞳だ。災厄の乙女がグリンワーズの森から抜け出したことを知るのはレギオンの他に、あの大神官しかいない。例えば街に同じ特徴の人間がいたとして、本物の災厄の乙女が森にいると信じられている限り問題はない――はずだ。
問題ないと、しっかり断言できないのは『災厄の乙女』と疑われて亡くなったレギオンの妹のことが心のどこかでひっかかっているからなのだろう。
『災厄の乙女』の特徴は――関係のない人にまで影響を及ぼした。

それはほぼ、間違いなく。

1：君のてのひら（後書き）

こんにちは、またははじめまして。青柳朔と申します。

第二部、はじめます。

当初完結した第一部の続きで投稿しようと思ったのですが、一応「春・花小説企画」に参加したのは第一部のみであることもあり、それぞれ分けることにしました。ご不便おかけしますが、ご了承ください。

2：それは甘い君の余韻

「――マリーツィア？」

繋いだ大きな手がぎゅっと、強く握りしめてくれる。ぱっと顔を上げるとレギオンが少しだけ心配そうに私を見下ろしていた。

大丈夫、そんな意味を込めて微笑んだ。繋いだ手を一瞬だけ放してフードをゆっくりと背におろした。

「――――――」

息を呑む気配に、身体が震えた。

重たい空気がその場を支配している。息を吸っても肺が押しつぶされるんじゃないかと思うほどに圧力があった。

目の前の二人の、射抜くような視線から逃れる術はないかと思考を巡らせるけれど、頭は上手く働いてくれない。

「……あんた、この子をどうしたんだい」

マダムの強い目はレギオンを見ていた。低く問う声は逃げることを許さないほどの力がある。

「そこは言えない、察してくれ」

レギオンの声もマダムに負けないほどの力が込められていた。一歩も譲るつもりのなさそうな様子に、マダムは呆れたようにため息を吐く。

「騎士を辞めて人売りにでもなったのかい。うちは買わないよ」

「冗談。こいつは俺の連れだよ。ただこの外見だからな、普通の宿じゃ泊まれないだろう？」

ふ、と笑いながらレギオンは私の頭をぽんと撫でる。

「……うちは、安宿とも違うんだがね。あんたには借りがあるし、一部屋好きにしていいよ」

マダムは大きなため息を吐き出しながらそう言う。

「ラナ、案内してやりな」

ラナさんはくすくすと笑いながら景気良く返事をする。騒ぎに気づいたのか他の女達も少し遠くからこちらを見ていた。レギオンの姿に気づくときゃあ、と明るい声ではしゃいでいる。
ラナさんを先頭に、その後ろに続いているレギオンの背中を追うようについていったけれど、周囲の視線に何故かむっとしてレギオンの隣に並んだ。
「どうした？」
隣を歩きながら上着の裾をぎゅっと握りしめると、レギオンが不思議そうに問いかけてくる。
「……別に。何でもない」
湧き出た感情を上手く説明できずに、便利な言葉で誤魔化した。
レギオンに集中していた視線がこちらに向けられていることに嫌でも気づかされた。ひどく居心地が悪い。
「ここよ。はい、鍵」
ラナさんは一つの大きな扉の前に立つと鍵をレギオンに渡した。
苦笑するレギオンの耳元にラナさんは口を寄せて、何かを囁いた。反対側のレギオンの隣にいる私にすら聞こえないような、小さな声で。
「……言われなくても分かってる」
「はいはい、そうでしょうね。そこらへん私達は責任とらないから、しっかりしてちょうだい」
くすくすと、またからかうように笑うラナに「とっとと行け」とレギオンは適当にあしらう。受け取った鍵で扉を開けると、扉の向こうから甘い匂いがした。
「何て言われたの？」
部屋に入りながら問うと、レギオンは顔を顰めて私から顔をそらした。
「――どうでもいい話だ」
はぐらかされたと気づいたけれど、深く追及はしなかった。
部屋の中は思いのほか広く、その広い部屋の中には大きなベット

が我が物顔で堂々と鎮座していた。窓辺には大きめの長椅子があり、残りは化粧台と小さな衣装棚くらいだ。およそ生活に必要な家具ばかりが足りない気がする。
「……ベット一つなの？」
首を傾げながら呟く。同じ部屋を使えというから、てっきり二人部屋なのだと思った。そもそも部屋の大きさとしては普通のベットならば余裕で二つ並べられるのにも関わらず、大人二人が寝ても余裕そうなベットがあるだけだ。
「おまえが使え。俺は長椅子でいい」
レギオンは素っ気なく答えながら荷物を置いた。
「別に二人くらい寝れそうだよ？　大きいし」
「馬鹿」
ただ事実を言っただけなのに、たった一言で叩き潰された。
王都へ来るまで一日半使ったけど途中宿に泊まるわけにはいかなかったので野宿で過ごした。その時には私がレギオンの隣に眠っても何も言わなかったのに、可笑しな話だなと思う。
「マリーツィア」
重たいマントを脱いでいると、レギオンが呼んできた。旅用のマントだから生地は厚めで、ずっと羽織っているのでけっこう疲れる。
レギオンの低い声はいつも気持ち良い響きで私の名前を口にする。
「何？」
マントの埃を払いながら丁寧に畳む。
「おまえ、部屋から出るなよ」
「――何で？」
「何でも」
きっぱりと言い切られてむっとする。おまえは、ということはレギオンは外に出るということだろう。そもそも旅の準備を整えるつもりなら市場に買出しにだって行くはずだ。
「何それ。それじゃあ森にいた時と変わらないじゃない」
むしろ森にいた頃よりも不自由だ。軟禁に近い。

「俺と一緒なら別にいい。一人でこの部屋から出るな。俺以外の奴に扉を開けるのも却下。特に夜は大人しく部屋で寝てること」
「……ここは危なくないんじゃないの？」
どうやら軟禁ではなく身を守れということらしいと理解するが、そもそもこの宿に来たのは私が災厄の乙女の特徴を持っていても問題ない場所だからのはず。
「普通の宿とは違う意味の危険があるからな」
「？　何それ」
首を傾げて真っ直ぐにレギオンを見上げると、レギオンは困ったように目をそらした。
「何でもない」
くしゃ、と髪を撫でられて、ぶっきらぼうに「少し休め」と言われる。
確かに王都まで野宿で過ごしたし――森を出るのはもう何年もなかったことなので、肉体的にも精神的にも疲れた。
「……レギオンは、どこかに行くの？」
独りきりで慣れない場所に置いていかれるのは心細い。ここの香りは甘く――どこまでも甘いけれど、それがどこか空々しくて怖い。
「どこにも行かねぇから……寝ろ」
今度触れてくるレギオンの手はどこか優しい。大きな手が髪を撫でる感触に、うっとりとして目を閉じる。髪を撫でられるのがこんなにも心地よいなんて知らなかった。誰もこんなに優しく私に触れてくれる人がいなかったからだろう。
「夕飯の時には、起こしてね……？」
目を閉じている向こうで、レギオンが笑う気配がした。ああ、と小さく答えが聞こえて――ほっとしてそのまま深く眠りへと落ちていく。
森の中に独りきり、誰も頼ることのなかったあの頃にはなかった安堵感に胸がいっぱいになる。

「……おやすみ」

耳に残る余韻は、どこかここの香りのように甘いのに――どうして、こんなにも幸せな気分になるんだろう。

3：独りの恐怖

深い深い森で独りきり。
足元に咲くのは小さな白い花。
周囲にあるのは森特有の薄暗い闇だけで。

「――レギオン？」

不安でそう呟いても、金髪の青年はどこにもいない。あの綺麗な紫の瞳が見つからない。
どうして、と叫びたい自分と、ああやっぱりとどこかで諦めている自分がいた。災いを呼ぶ人間の傍になんて、誰もいてはくれない。いつも優しい仮面をつけて、心の底ではこちらを値踏みして、そして疎んでいる。
だから、諦める癖がついていた。
手を差しのべられても、簡単にその手を取ろうとはしなくなっていた。
裏切られて、傷つきたくないから。

「マリーツィア」
ふわりと優しい声が頭上から降ってきた。
うっすらと目を開けると、そこには当然のようにレギオンがいた。

紫色の瞳が微笑みながらこちらを見てる。
――ああ、夢だったんだ。
そう思うと同時に、心の底からほっとした。いつも諦めることには慣れていたはずなのに可笑しいな、と笑う。
「ご飯の時間？」
「ああ、部屋に運んだから起きろ」
うん、と答えながらレギオンをじっと見つめる。レギオンはただ笑いながら手を差し伸べてくれる。
その手を躊躇なくとる自分に気づいていた。大きな掌は私の手をすっぽりと包みこんでしまう。剣を持つレギオンの掌は固いけれど、それすら私に安堵を与えるなんて変な話だ。
森から出て、まだほんのわずかな時間しか経っていない。
レギオンと出会って、共に過ごした時間もそう長いものではない。
あまりにも淡い繋がりに、無性に不安になることがあるなんて――彼に言ったらどうするだろう。
そんなことを考えていたせいか、温かい夕食はあまり味がしなかった。

夕食を食べ終わると、食器を片づけに行くレギオンは立てかけていた剣を持ち上げた。食器を片づけるだけなら剣は必要ないはず、とそう思うと慌てて私はレギオンの服の裾を掴んだ。
「どこか、いくの？」
あんな夢を見た後だからだ。
一人残されるのが嫌だった。そのまま置き去りにされるのではないかという不安が胸の中から溢れ出してくる。
レギオンは一瞬だけ目を丸くして――そのあとで微笑んだ。
「泊めてもらうからな、用心棒代わりだよ、一階にいる」
「私も行く」

レギオンとマダムのやり取りから、ここが普段普通の宿として使われていないことはなんとなく察していたので、レギオンの言い分は分かる。だから一緒に行こうと即答すると、レギオンは困ったように笑った。
「おまえは部屋にいろ」
「やだ……傍にいたい」
ぎゅ、と裾を握り締める力が自然と強くなる。レギオンが不審げに身体を屈めて私と目線の高さを合わせた。
「どうした？」
端的だけど、適確な問いに少しだけ切なくなった。
どうしてこの人を疑ってしまうんだろう。たぶんきっと、レギオンは私のことを置き去りになんてしないのに。
「――独りで、いたくない」
レギオンが部屋から出て行ってしまえば、私は手持無沙汰になって寝るんだろう。そしたら――またあの夢を見るような気がした。
「……おまえな、そんな顔でそういうこと言うな」
しかもこんな場所で、とレギオンは呟いた。
その発言の意味がよく分からなくて首を傾げていると、レギオンは苦笑して「分からなくていい」と言う。
「仕方ないな、少しだけだぞ。俺が戻れって言ったら部屋に戻れ。それから俺の傍から離れるな」
前半は少しばかり不服だったけど、大人しく頷く。レギオンはため息を零しつつ扉を開ける。
食器を厨房に持っていった後で、レギオンは大広間に行く。その後ろを大人しくついていきながら周囲をきょろきょろと見回す。レギオンを見て騒いでいた女の人達は綺麗な格好をしていた。そんな中にマントを脱いだだけの旅装束の私は、白鳥の群れに紛れ込んだあひるのようだ。
「あら、その子も連れ出したの？」
くすくすと笑いながら話しかけてきたのは、他の女の人と同じよ

うに綺麗に着飾ったラナさんだった。真っ赤なドレスが妖艶で、化粧を施した姿は薔薇のようだ。
「独りになりたくないって駄々をこねられたからな」
「ふぅん？　それならその格好は無いわ。うちの店の評判が落ちたらどうしてくれるの？」
　じっと私を見てきたラナさんの視線を避けるようにレギオンの後ろに隠れると、子猫をからかうような目でラナが微笑んだ。
「こいつは店の人間じゃないだろ」
「そうだけど、お客にはそう見えないってこと。マリー、いらっしゃい」
　手招きをされて、首を傾げる。「マリー」は私のことを言ってるのだろうか？
「マリーツィア、よね？　可愛くしてあげるわ」
　返事をしない私を不思議に思ったのか、名前を確認しつつラナさんはまた私を呼んだ。いつも私の名前を呼ぶレギオンは略さずに「マリーツィア」と呼ぶ。だからだろう、あまり愛称という考えが私の中には無かった。
「え、でも」
　レギオンには離れるなって言われたし。
　そう思ってレギオンを見上げると、「あれはいい」と許可が出た。ラナさんについていくのはいいのだろうか？　とおずおずと私はレギオンの後ろから出る。
「すぐに返せよ」
「やぁね、束縛する男は」
　ねぇ？　と同意を求められながらどう答えたらいいものかと困惑する。
　ラナさんに手を引かれながら顔だけ振り返る。
「すぐ、戻るね」
　一応それだけレギオンに言うと彼は微笑んで手を振る。実際にはすぐにレギオンのところに戻れないくらいにラナさんに拘束される

破目になる。

あまりどころかまるで着たことのないひらひらのドレスに、困り果てて立ち尽くす。

深い緑色のドレスはシンプルだけどスカートの部分がこれでもかというくらいに膨らんでいる。膝と同じくらいまでのスカートに、華奢な黒い靴、髪は三つ編みにしたあとに結い上げられ、ドレスと同じ色のリボンで飾られた。

薄くお化粧を施されてラナさんは満足そうに頷いた。

「うん、完成よ。ばっちり可愛くなったわ」

ほら、と大きな鏡の前に立たされて映る人が一瞬自分だと認識できなかった。

「レギオンに見せてやりましょう、ね？」

そう言いながらラナさんは連れ出した時と同じくらいのはしゃぎぶりで部屋から私を連れて行く。大広間の扉を開けると、そこには先ほどまではいなかった男の人達の姿があった。部屋に一歩足を踏み入れた瞬間に値踏みするようにこちらに視線が集まった。

――嫌な目だな、と眉を顰める。

「レギオン、どう？　可愛いでしょう？」

レギオンの前まで真っ直ぐにラナさんは私を連れて行き、私の肩に手を置きながらレギオンに問う。

「……化けたな」

一瞬レギオンは言葉に詰まって、その後で振り絞るように呟いた。

「ちょっとそれだけ？」

不満そうなラナさんにレギオンは少し苛立ちながら立ち上がる。

「馬鹿か、やり過ぎだろう！　周りを見ろ周りを！」

レギオンは私に聞こえないように声を潜めているつもりのようだけど、ちゃんと聞こえていた。似合わないだろうか、と自分の着る

服をまたまじまじと観察する。
「あのねぇ、さっきの格好でも充分目立つわよ？　ちゃんと自分のだって主張しておけばいいじゃない」
「そういう問題か！」
たくっと苛立ちを隠さないままレギオンはどかりとソファに座る。大広間にはあちこちにソファとテーブルがあるだけで、それ以外は大きな時計が一つその部屋の主のように存在している。
「マリーツィア」
呼ばれて顔を上げると、レギオンが隣をぽんぽんと叩きながらこちらを見ている。
大人しく隣に座ると、レギオンがこちらをじっと見ていた。
「……なに？」
似合わない？　と問おうとして止めた。肯定されるとたぶん傷つく。
「いや、化粧もしたのか？」
レギオンが手の甲で頬に触れながら問いかけてくる。至近距離で目が合って何故か心臓が痛くなった。
「わ、わかんないけど、たぶんちょっと」
そうか、とレギオンは微笑んでいた。その顔に何となく居たたまれなくて思わず俯く。そして周囲からの視線が止んでいることに気づいた。
「そういう格好も似合うな」
ぽん、と頭を撫でてレギオンが呟く。褒めてもらえて嬉しいはずなのに、どうしてか恥ずかしくて顔が上げられなかった。

4：傍にいる、ただそれだけだけど

しばらくレギオンと雑談を続け――周囲を見ていると綺麗に着飾ったお姉さん達はやってきた男性とどこかへと消えていくようだった。

どこに行ってるの、とレギオンに問おうとして止めた。なんとなく「聞くな」と言われている気がした。

会話も途切れ、夜も更けていき――眠くなった私はレギオンの肩にもたれながらうとうとしていたのだろう。

「マリーツィア」

優しい声が降ってきて、ぼんやりとした頭で「うん？」と答える。

「眠いんだろ。部屋に戻れ」

呆れたような、そんな声でレギオンは言う。眠い目をこすりながら「レギオンは？」と問う。

「俺はまだいる。むしろこれからが問題だからな」

剣に触れながらそう言うレギオンを見て、首を傾げる。起きている間は周囲の様子を見ていたが――剣を持ち出すようなことはなさそうなのに、と思った。

「おや、その子まだいたのかい。早く部屋に戻しな」

マダムがどこからかやって来た。その子というのは間違いなく私のことなのだろう。どうして皆して「戻れ」と言うのか分からなかった。

「でも」

まだここにいたい、と続けようとすると、大広間の入口で大きな音が響いた。花の生けてあった花瓶が割れたようだ。

きゃあ、と女の人の悲鳴が何人分も大広間に響き渡る。

「始まったか」

ふぅ、とレギオンがため息を零して剣を持つ。

「な、何？」

入口の花瓶は勝手に倒れるわけがない。入口で何やら騒いでいる男性が倒したのだ。もう何を言っているのか分からないほどの奇声だが、「なんで」「どこにいる」「早く出せ」――そんなことを叫んでいるようだった。

「マダム、そいつを頼む」

そう言い残してレギオンは剣を抜いた。勘だけどたぶん本当に剣を使うことはないんだと思う。

「レギオン」

追いかけようとすると、くいっと腕を引かれる。

振り返るとマダムが私の腕を掴んでいた。

「いくんじゃないよ、怪我でもしたらどうするんだい」

「でも、レギオンが」

怪我の心配をするようなことなら、なおさらレギオンから離れるのは不安だ。剣の腕は確かなようだけれど、私はまだレギオンが本気で剣を振るうところを見たことはない。怪我をしないという保証なんてない。

「あれの心配は必要ないよ。この程度のことで怪我するような男じゃないさ」

マダムは優しく微笑んで私の胸の中にあった不安を見事に言い当ててしまう。

「それよりむしろ、あんたを向こうに行かせるとあいつに叱られるのは私だからねぇ。でもまぁ、随分と過保護だこと」

苦笑しながらこちらを見つめる瞳には、何かを探るような気配がある。その瞳の底知れなさに、何故か身体が震えた。

「あんた、あれとどういう関係なんだい？」

問われて、答えられなかった。

射抜くような瞳は、今まで接してきたことがない。森の中にいた頃、これほど強く私を見つめてくる人間なんていなかった。直視さ

れることがこんなにも圧力のあることだと知らない私は、ただ何か言葉を探すけれど、何も思い浮かばない。
私とレギオンの関係を問われても、明確な名前がない。
家族ではない、友人とも違う。まして恋人ではない。
ただお互いの傷を抉り、手当てをして――私は差し出された救いに縋るようにその手をとった。
「わ、たし……」
「マダム！　これはどうする！？」
何かを紡ごうとして開かれた声は、レギオンの叫び声で遮られた。
はっとして向こうを見れば、レギオンは床に転がる男を縛りつけているとことだった。怪我ひとつないその様子にほっとする。
「そこらへんに放り投げときな！」
マダムの言う通りに暴れた男を放りだしたレギオンは剣を肩にかけながら戻ってくる。そういう姿を見ると、やっぱり騎士だったんだな、と実感する。
「どうした」
マダムの問いが頭の中で何度も何度も響いていたからだろうか、たぶん私は変な顔をしていたのだろう。私の顔を見るなりレギオンが端的に問いかけてくる。
「なんでも、ないよ？　お疲れ様」
少し無理をして微笑むと、レギオンは訝しげに眉を寄せる。
ああ、嘘の笑いは得意だったはずなんだけど、と心の中で苦笑した。いつからレギオンには通用しなくなってしまったんだろう。それほど長い間一緒にいたわけでもないのに。
「……そろそろ部屋に戻れ」
しかしレギオンはこれ以上の追及はしない。
そこが彼の優しさで甘さなんだろう。いつもそうやって私を甘やかしている気がする。そして問いただすべき時には強引に口を開かせるくせに。
まだここにいたい。レギオンの傍にいたい。

でもたぶん、この願いは聞き届けてくれない類のものだ。ここは強引に連れ戻されるだろう。
「じゃあ、戻る。レギオンも早く戻って来てね？」
「ああ」
優しく頭を撫でられてほっとする。そのまま二階に向かおうとすると、レギオンが背後で舌打ちをしたのが聞こえた。
「？」
どうしたんだろうと振り返ると、レギオンがこちらに近づいてくる。
「部屋まで送る」
「……え？　でも、すぐそこだよ？」
「いいから」
そう言ってレギオンは私の肩を抱き寄せた。どうしたんだろうとただ疑問符を浮かべてレギオンを見上げる。
すぐに部屋に着くと、レギオンはまるで放り投げるみたいに私を部屋の中に押し込む。
「いいか、すぐに鍵をかけろ。俺以外の人間には扉を開けるな。さっさと寝ろ」
そう言うだけ言って、レギオンは扉を閉める。しかし扉の向こうからは立ち去る気配がしない。たぶん私が鍵を閉めるのを確認するまではそうしているつもりなのだろう。
仕方なく扉の鍵を閉めると、向こう側でレギオンが去っていく気配がする。
鍵なんて閉めなければ良かっただろうか、と心の中で思いながらベットに横になる。たぶんいつまでも鍵を閉めずにいたらレギオンは怒って扉を開けただろうけれど。
ふかふかとしたベットに横になったまま、そういえば髪やドレスはどうしようと思いだす。ドレスはなんとか脱げると思うけど、髪は自分では解けないかもしれない。
まぁいいか、とそのままベットの上でうつらうつらとまどろむ。

――あんた、あれとどういう関係なんだい？

眠りに落ちようとする私の脳裏に、マダムの声が蘇る。
知らない。
関係なんて、そんな確かなものはない。
ただ、傍にいるだけ。

ねぇ、でも。
ただ傍にいるだけなのに、理由が必要なの？

5：寂しさは夜の闇に溶けて

胸の奥から込み上げてくる寂しさのせいだろうか、あまり熟睡できた気がしない。

寝不足のせいかかすかに痛んだ頭に苛立ちながら起き上ると、まだ暗い部屋の中に求める人影はいなかった。

「……レギオン？」

もう夜は更けているはず。数時間もせずに太陽は東から顔を出すのだろう。

それなのに彼は部屋に戻っていない。暗い部屋の中で私の声は迷子のようにいくあてもなく響いて消えていった。

すぅ、と胸が冷えていく。

あのグリンワーズの森にいた時から、こんな感覚には慣れていた。親しげに声をかけてくれた人々が、目を覚ました次の日にはいなくなっている。別れの言葉もなくまるで初めから存在しなかったかのように消えている。

ぽろりと口から零れたのは嗚咽でもなんでもなく、小さな子守唄だった。

言葉を忘れたくなくて、忘れないための手段としてただ毎晩毎晩歌い続けた唯一昔からの私が持つもの。

それはとても小さな歌声でしかないはずだった。

この広い部屋の闇の中に飲み込まれてしまえば、部屋の外にいるレギオンに届くことなんてないだろうと思っていた。

レギオンは私が歌を歌うことは弱さだと知っているから。

だから気づかれたくなかった。

彼の帰りを疑って不安になるなんて、それは私とレギオンの薄い関係をさらに希薄にしてしまいそうな気がして。

再びうとうととしていたのだろう。
目を開けると外は薄明るくなっている。
それでも部屋の中にレギオンの姿はなく、さすがに心配になって扉へと走る。もしかしたら下のソファで眠ってしまったんじゃないだろうか。
鍵を開け、扉を少しだけ開けて外の様子を窺う。
ちょうどその時だった。

「ねぇ、レギオン」

細い隙間から、艶めかしい女の人の声が聞こえる。
「！」
その隙間からはレギオンの腕をからめ取りながら微笑む女の人の姿が見えた。
ずきずきと胸が痛んだ。呼吸が上手くできない。苦しい。頭が痛い。
「これから寄らない？　まだ夜明けまで少し時間があるわよ」
「いや――――……」
誘うように笑う女性を前にレギオンが何かを言おうと口を開いた。それ以上は耐えきれなくて勢いよく扉を開け放つ。
「――……っ！」
唇を噛みしめてレギオンを見ていると、女性は驚いたようにこちらを見ていた。レギオンも一瞬だけ目を丸くした後に苦笑する。
「……悪いな。うちのお姫様がご機嫌ななめみたいなんでね」
そう言ってするりと女性の腕から逃れて、すたすたとこちらへ向かって歩いてくる。数歩の距離が何メートルも離れているような気がした。
実際には短い、しかし私には途方もなく長く感じる時間をかけてレギオンが私の目の前に立つ。

「……こら。部屋から出るなって言っただろ」
こつん、と頭を叩かれる。
「……こんな時間まで帰ってこないレギオンが悪い」
むす、と下からレギオンを睨みながら反論するとレギオンはただ苦笑する。
「この時間までが仕事だからな。俺も、……他の奴も」
ちらりと先ほどの女性を見ながら、レギオンは扉をゆっくりと閉める。閉めた扉にまたしっかりと鍵をかけてから振り返る。
「……おまえ、そのまま寝たのか」
私を見下ろしながらレギオンが呆れたように呟いた。
「――あ。うん」
レギオンにそう言われてから、自分が髪を結われたまま――綺麗なドレスを着たまま寝たかたドレスはくしゃくしゃになってしまっているのを思い出す。おそらく髪はぐちゃぐちゃだろう。
「たくっ……ほら、こっちにこい」
化粧台らしきものの上から櫛をとってレギオンがベットに腰掛ける。隣に座るように促されて素直に隣に座った。
「こっち向いて座ってどうすんだ。背中向けろ馬鹿」
そう言いながら無理やり移動させられ、内心首を傾げながら大人しくしていると、レギオンが私の髪に触れた。見えてはいないけれど器用に髪を解いているようだ。きつく結われていた髪がすぐに解放されて、櫛で梳かされる。
何度も何度も櫛が髪を梳き、それがひどく心地よくてうっとりと目を閉じた。触れる手はいつも以上に優しい。
「……おまえ、夜更けに起きてたろ」
私の短い髪を丁寧に梳きながらレギオンがぽつりと呟く。
「ど、どうして？」
動揺したのを隠そうとしたけれど、上手く誤魔化せている気はしない。驚いたのがそのまま声に出てしまった。
「別に。声が聞こえたから。また夜に歌ってたのか」

「……目が、覚めたから。そしたらなかなか寝付けなかったし」
夜は昼間よりも不安を大きくする。不安にな夜に歌を口ずさんでしまうのはもはや私の癖になっていた。
「そうか」
レギオンはそれだけ呟いて黙り込んだ。それ以上の追究がないのは助かる。
それからしばらく、髪を丁寧に梳いていたレギオンの手が離れていった。
「ほら、これでいいだろ。服はもうどうせ無駄だからそのまま着てろ」
そう言いながらレギオンはあくびを噛み殺しながら長椅子に横になる。
「レギオン？　私もうベット使わないからそっちで寝たら？」
「……こっちで良いって言ってんだろうが。おまえこそ夜更かししてたんだからまた寝ればいいだろ」
でも、と続けようとしたけれどレギオンは素知らぬ顔で長椅子で寝始めてしまう。まだ起きているのだろうけど目を閉じている彼を見ると声をかけるのが躊躇われた。
「……」
結局何も話すことが出来ずに黙り込む。
カーテンの向こうから透ける淡い光は間違いなく朝の到来を告げている。すべきことも特になくてベットに腰掛けてぼんやりとしていると、ふぅ、とため息が聞こえる。
レギオンの方を見るけれど、彼はこちらに背を向けたままだ。
「昼になったら買出しに行くぞ。大人しく待ってろ」
それはまるで独り言のように呟かれたセリフではあったけれど。
「うん」
気遣われた優しさが嬉しくて素直に応える。心の奥底に沈んだ何かが浮上してきたようだ。先の約束がある以上はそれまでは一緒にいられるんだと安堵している自分に少しだけ苦笑した。

「おやすみ」

背を向けるレギオンにそう声をかけるけど、返事はない。寝ているのか、それとも寝たふりなのか――それを確認することは叶わないけれど、その時はただ静かに寝かせておこうと思えた。

6：この世界の闇を知らない君は

レギオンが寝てから二時間ほど経った頃だろうか――こんこん、と扉が誰かの訪れを告げる。

「あ、と……」

立ち上がって扉を開けようとして、留まる。

誰であろうと扉を開けるな、そんなことをレギオンに言われていた気がする。言った本人は部屋にいるものの寝ているし、かといって宿の人を無視するわけにもいかないだろう。

そう悩んでいると、扉の向こうから明るい声が聞こえた。

「あれ？　まだ寝てる？」

声の主はラナさんだ。

「起きてます」

咄嗟に答えてしまって、さらにどうしようと自分で自分を窮地に追い込んでしまった気がする。

「あら。もしかして警戒してるの？　レギオンはまだ寝てるのね」

ラナさんは気分を害した様子もなくくすくすと笑って「過保護ね」と呟いた。

「あの――」

どんな用だろうと口を開くと、肩を引かれて後ろに下がる。

「なんだ。まだ朝だろうが」

見上げればそこにはまだ少し眠そうなレギオンが立っていた。話し声で起こしてしまったようだ。

「ごめん、起こした？」

「気にすんな。もともと眠りは浅いんだよ」

くしゃ、と髪を撫でられてレギオンは寝不足を感じさせないしっかりした足取りで扉まで向かう。鍵を開けて、わずかに開けた隙間からはラナさんの顔が見えた。

「お熱いこと。朝ごはんはこっちに運んだ方がいいのかしら？」

「ああ、頼む」
レギオンはまるで自分の身体を盾にして室内を――私をラナさんの視界に入れないようにしているようだ。どうしてだろうと思いながら首を傾げる。
「マリー。もっと質素な服を持ってきたから、そっちに着替えなさいね」
ラナさんはまるで気にしていないようで、姿が見えていないだろう私に親切に声をかける。
「はい。ありがとうございます」
「お礼を言われることじゃないわ」
素直にお礼を言った私に、ラナさんは苦笑したように応えた。
着替えを受け取ったレギオンは一度扉を閉めて私のもとまで戻ってくる。ラナさんが持ってきた着替えを手渡してすぐに扉へと向かう。
「朝飯持ってくる。その間に着替えてろよ」
そう言いながらレギオンは鍵を持って行った。どうやら私が中から鍵をかけるのは心配らしい。それにしても朝ごはんを持ってくるだけの短い間なら、そこまで気にすることはないだろうにとため息を吐く。
着替えはシンプルなワンピースだ。今着たままのドレスと比べると格段に質素だ。
しかしその方が慣れているのでどこか安堵する。綺麗に着飾るのは悪くないけれど、どこか疲れる。
四苦八苦しながらドレスを脱ぎ捨て、飾りのない黒いワンピースに袖を通す。

「起きてるのかい」
ふぅ、と息をついた時だった。
扉の向こうからマダムの声が聞こえて立ち上がる。

「はい。……あの？」
昨晩のやり取りのせいか、少しマダムには苦手意識がある。
そうして警戒しているのがそのまま声に出てしまったのだろうか、マダムが扉の向こうで苦笑したのが分かった。
「扉は開けなくていいよ。まだ危ないだろうしね」
「……危ないって」
レギオンといいマダムといい、何が危ないというのだろうと首を傾げた。ここが普通の宿屋でないことは分かる。けれどどう身に危険が及ぶかなんて私にはちっとも分からなかった。
「……ああ、やっぱり分かってないんだね。あんたは」
マダムの声が少しだけ柔らかくなる。その奥でどこか寂しさすら感じさせるような声に私は居心地が悪くなった。
どういう意味の言葉なんだろうと、疑問を抱かずにはいられなくなる。人との付き合い方というものを学ぶことなくここまで成長してしまった私には、少ない言葉からその人の感情を読み取ることがひどく難しい。
「ここはね、女達が男に夢を見せる店だよ。……身体を使ってね」
「……？」
抽象的な表現に首を傾げる。その気配が外にも伝わったのだろうか。マダムが苦笑した。

「――娼婦、って言えば分かるかい？」

言葉を呑んだ。
その単語は、どこかで聞いたことのある気がして――それでもそれが何なのかは具体的には分からなくて。それでも自嘲気味に、そしてどこか嫌悪するように呟かれたマダムの言葉に、それが普通の世界のものではないのだと知る。
あの閉ざされた森と同じ――明るい表の世界からは遠ざけられた存在。

ただ黙りこむ私をよそに、マダムは言葉を続けた。
その言葉達はどこか攻撃性を持って私の脳まで届き、ただ沈黙する私に容赦なく降り注いだ。

ああ、やっぱりあの森は私の鳥籠だった。
あの小さな世界は私を閉じ込めておきながらも、外界の世界から私を守っていたのだ。私は「外」の汚さを知らない。その汚れが意味するものも。

「……そろそろ気づいたんじゃないかい？　この店には、あんたに似た子が多いだろう」
静かに問いかけてくるマダムの声に、意識が戻った。
最初に感じた違和感。
白っぽい髪に、緑色に近い瞳の人々。町ではあまり目にしないその色彩は、ここに溢れていた。
「災厄の乙女に似ている。それだけの理由でね、あの子達は優先的にこういう世界に送られるんだよ。口減らしにしても、何にしてもね」
「……でも」
災厄の乙女はもう九年も前に捕まっている。災厄の乙女と呼ばれたのは、他でもない私なのに。
「災厄の乙女かどうかなんてどうでもいい話なんだよ。災いの象徴に似ている。それだけで人から嫌われる理由になるには充分なんだ」
どうして、と知らず知らずに呟いていた。
その託宣すら、全部偽りなのに。
私という存在だけが罪を背負うことで、何もかも解決されるはずだったのに。
それなのにこの国は「災厄の乙女」に連なる女性を疎む。
「……あんたは純粋なんだろう。世の汚さを知らない。まるでその髪のように真っ白なんだ」

マダムが静かに呟いた。
だから、あんまりここにいちゃいけないよ。

それから少しもしないでレギオンは朝ごはんを持ってきた。
その時にはマダムの姿はなかったのだろう。ただベットに座って待っていた私が静かなことに首を傾げ、熱はないかと手を伸ばしてくる。
大丈夫だよ、と笑うが、レギオンは納得していないようだった。
そのまま静かに食事を始め、何を食べたのかもどんな味だったのかも分からないままに食器は片付けられた。

――人々から存在しないものとして無視され続けて。
自分の名前を忘れてしまうほどに誰かから名を呼ばれることもなくなって。
言葉を失うことを恐れて大人に怯えながら夜な夜な歌を歌って。
私と、こういう世界に生きている少女達と、どちらが不幸だったんだろう。

二つは同じもののようで、まるで交わらない別のもののようで。
天秤にかけても重さは等しくならない。私は今までの人生が幸せだったとは笑えないけれど、それはたぶん彼女達も同じなのだろう。

それでも確かなのは。

「災厄の乙女」の生み出した不幸はこの国に溢れているのだ。

7：君がくれる選択に、

深くマントのフードを被り、隣を歩くレギオンからも私の顔が見えないように俯いた。

様子が可笑しいということに気付き始めたレギオンは先ほどからこちらを窺うように視線を投げてくるけれど、それに気づきながら私は無視を続けた。

溢れ出た『災厄の乙女』という不幸は、この国を狂わせてしまった。

その元凶である私は、どうしてこんな場所にいるんだろうと自問自答する。

そして、どうしてレギオンは私をここに連れてきたんだろう。どうして、あの場所を私に教えたんだろう。レギオンがあの館がどういう場所なのか、そしてそこにいる彼女達がどういう人なのか、知らないはずがないのに。

知っていたはずなのに、どうしてそれを見せつけるように私を――。

「マリーツィア」

痺れを切らしたような声がすぐ隣から降り注いだ。

見上げると、少し苛立ったような顔でレギオンが私を見下ろしている。

「何があった」

俺の知らない間に、とその言葉を口に出さないのは、信用なのかそれとも突き放しているのか。

そんな些細なことですら疑心暗鬼になる自分に嫌気がさす。

顔を上げると落ちそうになるフードを、落ちないようにとレギオンが直した。そういった優しさにすら、こっちは泣きたくなるっていうのに。

「――――……レギオン」

まるで捨てられた子猫の鳴き声のような、か細い声しか出なかった。

それでもレギオンは雑踏の中で確かに私の声を聞いてくれる。

「どうして、私をここに連れ来たの？」

質問の後に、片割れしか伺えないレギオンの紫色の目が大きく見開いた。しかしそれも一瞬のことで、すぐに平静さを取り戻す。

「……聞いたんだな」

確かめるまでもない、ただの呟きだった。

こくりと一度頷くと、レギオンは深く息を吐きだした。そして小さく「まだ教えるつもりはなかったんだけどな」と自嘲気味に呟いた。

「どうせマダムあたりだろう、そんな余計な話をするのは」

「……余計じゃないよ。私は部外者じゃないんだから」

あの館にいる女の人が、ああいう仕事をしているのは――『災厄の乙女』のせいなのだから。

「部外者だろう。間違えるなマリーツィア。おまえがいようがいなかろうが、災厄の乙女がいようがいまいが、ああいう場所は確実に存在している。子供を売る親が悪いし、そして人を商品として扱う奴が悪い。おまえには非がないんだよ」

「でも」

抗議しようと口を開くけれど、それもすぐにレギオンの言葉に遮られた。

「罪があるとすればそれは大神官一人の罪だ。おまえは被害者だし、彼女達もある意味で被害者なんだろう。容姿は選別の一つの要因に過ぎない」

きっぱりと言い切られると、それ以上に反論する気力を奪われる。

ただ俯いて黙り込むと、レギオンが少し乱暴に私の腕をひいた。

「何度も言わせるな。おまえは災厄の乙女じゃない」

強引に腕を引かれて、賑わう人混みの中をすたすたと歩いて行くレギオンに私はついて行くのが精一杯だ。
「俺はおまえを責める為にここに連れてきたわけじゃない。おまえがこの場所を覚えておくべきだと思ったから連れてきたんだ」
前を歩くレギオンの顔は、私からは見えない。ただ切々と語られる言葉があまりにも強くて、どこか悲しくて、それだけで胸が痛くなった。
いつの前にか、そこは甘い誘惑の街の入口だった。
真昼のそこは甘い香りだけを漂わせてしんと静まり返っている。まるで昼夜が反転してしまったかのようだ。
「忘れるな、マリーツィア」
隣に立つレギオンが真っ直ぐに前を見て言った。
「不幸だったのはおまえだけじゃない。その種類に違いはあったとしても、誰にだって悲しみも辛さもあったんだ。どう足掻いてもこういった場所は消えないし、消せない。ここに集まった人にもそれなりの過去があって、ここに来た理由がある。それのすべてをおまえが自分の罪だと背負う必要はない」
繋がれた手がぎゅ、と強く握られた。
まるでもう一人じゃないと言ってくれるようで、じんわりと涙が滲む。その強さに応えるように強く手を握り返した。
「……それに、不幸ばかりがあるわけではないしな」
そう呟いてやっとレギオンは私を見た。苦笑しながら頬を流れる涙を空いている手で拭ってくれる。
「ここにいた奴らの笑顔に、嘘はなかっただろう？」
マリー、と呼んで私を連れ出したラナさんの笑顔は、たぶんお客さんに向けるものとは違ったんだろう。ドレスを着せてくれて、髪を結ってくれている間のラナさんはずっと笑っていた。そこには何の影も曇りもない。
「おまえはこの王国を捨てていく。俺にはもうその覚悟はあるが、それでもおまえにはまだ選択の余地があるはずなんだ」

涙で濡れた目でレギオンを見つめながら、私は静かに首を横に振った。
「選択なんて、する余地はなかったよ。私はこの髪とこの瞳でいる限り、この王国では暮らせない」
「――本当にそう思うか？」
レギオンが苦笑いしながら問いかけてきた。
「ただ暮らすだけなら、どこにでも場所はある。こういう闇に近い街の裏もどこにだってあるし、時間はかかるだろうが小さな村や街でなら居場所を作ることもできるだろう」
方法なんていくらでもある、とレギオンは残酷にもここで選択する道を広げるのだ。
「おまえはこの国の一部しか知らない。捨て去る前に、見ておくべきだろう。王都の賑わいも、その街の中にある闇にも。……俺はおまえに後悔させたくはないんだ」
後になって全てを捨てて後戻りできなくなった時になって、あの時にあの道を選んでいれば、あの道に気づいていれば、なんて。
そんなことを、未来の私に言わせない為に。
止まりかけた涙がまた溢れ出して、私はレギオンの胸に縋りつく。
どうしてこの人はこんなに優しいんだろう。
その優しさに慣れてしまったら、もう離れることなんて不可能に違いない。そしてもう私はその優しさに甘えてしまっているんだ。
「……後悔、しないよ」
レギオンの胸に顔を押しつけながら、くぐもった声で私は答える。
「どんな場所を選んでも、どんな道を歩いても、隣にレギオンがいるなら、後悔なんてしない」
私が選ぶ住処がどこであるにしても、居場所はレギオンの傍だから。その選択だけは、私は後悔しないと誓えるから。
「――――おまえな」

どこか困ったような、レギオンの声。

慰めるように髪を撫でていた手が背に回る。大きな腕に包み込まれて、その中のぬくもりに私は心の底から安堵した。

本当に、末恐ろしい女だよ。

諦めにも似たレギオンの言葉に、私はただ首を傾げるしかなかった。

8：狂った世界の中で

それから街へと戻り――長旅に必要と思われるものを買って、私の着替えもいくつか見繕った。動きやすい服と、質素なワンピースを何枚か。

そうして過ごしているうちに太陽は西の空へと沈み、空が赤く染まり始めていた。

「買い忘れはないな。帰るぞ、マリーツィア」

「うん」

大きな荷物を抱えながらレギオンははぐれないようにとわざわざ片手をあけて私と手を繋ぐ。私が持っているのは自分の服だけだからそれほど重くない。

「……いつ出発する？」

準備は今日一日で整った。今日の夜にでもここを離れることができるのだ。

「さっき町で聞いた話じゃ、最近王都も物騒らしいしな。出来るだけ早く出発したいところだ」

「？　何かあったの？」

王都といえば騎士団が治安を守るために配置されている。その王都が物騒なんて、とマリーツィアは首を傾げた。

「……通り魔が出ているらしい。若い女ばかり斬られてる」

しばしの沈黙のあとでレギオンが口を開いた。私に聴かせることを躊躇ったんだろうと分かってしまうから、その優しさが少し切ない。

「だからおまえも、絶対に一人で外を出歩くなよ。夜でも昼でもだ」

「分かってるよ。出てないじゃない」

通り魔の件があるにせよ、無いにせよ、私が一人であの館から――否、あの館の一室から出ることはない。いつもレギオンという守

りがあってこそだ。
ならいい、とレギオンが微笑む。
その時だった。
「きゃあああああぁぁぁぁぁぁ！」
夕暮れの薄闇を切り裂くような悲鳴が、夜に近い闇の街に響いた。
「！」
パッとレギオンが声のする方へ顔を向ける。そしてすぐに私を見た。少し困ったような、何かを躊躇うような、そんな顔だった。
こういうとき、レギオンの昔の顔が窺える。彼はあの塔に来る前、左目の光を失う前は騎士として、人を守るために駆けていたんだろうと。
「行こう？」
私が首を傾げて問うと、小さく「悪い」と呟く。
悪いことなんてしていないのに、と苦笑するがレギオンには見えていないだろう。
繋いだ手をぎゅ、と強く握りしめて走り出した。ちらほらと騎士団らしき人の姿が多かったから、レギオンが向かう必要はないかもしれない。それでもここで放っておけば彼は気にするんだろう。
悲鳴が近かった分、すぐに辿り着いた。
噎せるような血の匂いに、一歩後退る。生暖かい血が地面に赤い海を作っていた。
「っ！」
レギオンが悔しそうに歯ぎしりした。そしてすぐに私を抱き寄せて「惨状」を見せないようにする。

すぐに駆け付けたというのに――犯人はいない。
私達よりも早く駆けつけてきた騎士団の人間が血の匂いの中で声を上げていた。集まる人々を近づけさせないように、そして何も言わぬまだ温かなその「人」を調べているのだろう。
「……レギオン」
私は大丈夫だよ、と小さく呟く。自分のすぐ傍らで人が死んでいるというのに私は不思議と冷静だった。レギオンの胸にもたれながら、その少し強い腕の拘束から逃れようとする。
「おまえは見るな」
しかし腕から抜けようとすればするほど、レギオンは腕の力を強める。

「被害者はまた」
「ああ、この街の女だな」

そう話す周囲の野次馬の声が聞こえた。
この街、が指すのはつまり――この夜の街のことなんだろう。「また」ということは前の被害者もそうだったということ？

「今度は見事な白い髪だな」

嘲笑するその声に、びく、と身体が震えた。
「この間は目が緑だったんだっけか？」
「いや、髪も白っぽかったよ。犯人もどういうつもりなのかねぇ」
知らず知らずに震えが生まれた。
白い髪。緑色の瞳。その特徴が示す人間はただ一人だ。
そしてその被害者を見ながら世間話をする男性の声には憐れみも悲しみもない。あるのは「仕方ない」という雰囲気だけ。
殺されても仕方ない。
だってソレは、普通の人ではないのだから。

気がつけば周囲はそんな会話ばかりしている。

「レギ、オン」

ぎゅ、とレギオンの服を握り締めて名を呼ぶ。応えるように彼はまた腕に力を込めた。

「戻るぞ」

そう短く呟いて、私をそのまま抱きかかえた。片手で荷物と同じように持ち上げられたけれど、そんなことも気にせずにただレギオンにしがみつく。

――人の死は怖くない。

けれど、その死を笑う人々が怖い。

「……じょうぶかい？　嫌なところに出くわしたねぇ」

途切れた意識の中で、マダムの声が聞こえた。

レギオンにしがみついたまま、私は全てを拒絶していた。何も聞きたくなくて、何も見たくなかった。ただぬくもりに縋りついて恐ろしい現実から目を背けた。

ゆっくりと顔を上げると、いつもよりもずっと高い視線で私はマダムを見下ろしていた。マダムの心配そうな瞳が私を映し出している。

「ゆっくりお休み。今日は用心棒もいらないよ」

少し荒れた手が私の髪を優しく撫でて、緊張で強張っていた身体から少し力が抜けた。

「悪い」

レギオンはそう答えながら苦笑する。館には早くも『お客さん』が集まってきていて、綺麗に着飾ったお姉さん達があちこちから私

とレギオンに視線を投げてくるのに、レギオンはその全てを無視したまま私を下ろそうとはしなかった。
肩に顔を埋めて涙を堪えた。
――この国はいつから狂ってしまったんだろう。
レギオンが言ったように、どの国にもこういう場所はあって、こういう店はあるんだろう。そしてそこで働く人がいる。それはたぶんどうやっても覆ることのない真実だ。
災厄の乙女がこの国に根付いて。
そして似た容姿の女性が疎まれて。
理解はできる。仕方ないのかもしれない。災厄の乙女そのものが消えない限りはどう足掻いても変えられるものではない。
それでも。
そうだとしても。
殺されて、命を奪われて、人々に笑われるなんてことは仕方ないことなのだろうか。

「マリーツィア」

低い声が私の名前を呼んだ。
もう随分と耳に馴染んだその声に、沈んでいた意識を浮かび上がらせる。
目の前には紫色の宝石のように綺麗な目があって、無意識に眼帯で隠された方の目に手を伸ばしていた。いつもなら眉を顰めて「何してんだ」の一言でもありそうなものなのに、レギオンは何も言わずに私を見つめてくる。
「――……どこからが間違いだったんだろう」
ぽつりと呟いても、レギオンは表情を変えない。

「あの人が偽りの託宣を下した時から？　私のおじいちゃんとおばあちゃんがあの人に会いに行った時から？　私が生まれた時から？　お母さんとあの人が出会った時から？　……どのくらい遡ればやり直せるんだろう」
少なくとも『災厄の乙女』なんて託宣がなければ、今日あの場であの女性が殺されることはなかっただろう。違う場所で、違う女性が、違う理由で殺されることはあるかもしれないけれど。
「――――過去がやり直せるなら、レギオンは妹さんを失わずに済むのにね」
そう呟きながら微笑むと、レギオンが怒ったように眉間に皺を寄せた。
伸ばしていた手がレギオンの大きな手に包み込まれて、火がついたように光る紫水晶の瞳が私を睨んでいた。
「過去は戻らない。そして未来がどうあれ、人と人の出会いには意味があるはずなんだ」
「……その意味が、人を、国を狂わせるものであっても許されるの？」
十五年前。
たった二人が出会ったことでこの国は変わってしまったのに。
「たとえ国や世界が狂うとしても、人が不幸になるとしても」
掴まれた手首が痛い。
苦しそうなレギオンの顔を見るのが辛くて、それでも目をそらすことが出来なくて困り果てる。
「頼むから」
懇願する声に、心臓が鷲掴みされるような感覚に陥る。
レギオンは私の肩に額を押し付けて、神様にでも祈るように言った。
「生まれなければ良かったなんて――……出会わなければ良かったなんて言わないでくれ。俺はおまえと出会ったことを不幸だなんて思わないし、なかったものにしたいなんて思わないから」

ああ。
苦しげなそのセリフに、私は現実を思い出す。
例えばあの託宣がなかったら、私が生まれていなかったら。
私はこのぬくもりを知ることは出来なかったんだ。

ごめんなさい、と私は心の中で呟いた。
もし過去をやり直せるとしても、全てをなかったことにできるとしても。
レギオンが、妹さんを失うことになってしまっても。

――私は、この人を求めるだろう。

9：ただ君という存在を想う

お互いが沈黙の中に沈んでいたのはどれほどだっただろう。
金色の髪だけが私の視界の中で鮮やかで、私の肩に埋もれるレギオンは何も言わないまま、顔をあげることもない。
夕闇はそのまま夜の闇へと変わり、部屋の中はわずかな明かりもないおかげで真っ暗だ。窓から零れる月の光だけが私達を照らしている。

――ごめんなさい、と。

そう口にするのは簡単だったはずなのに、私の唇はそれを音にしようとしない。
優しさに溺れて、縋りつくことに慣れて、私は両手では抱えきれないほどのものをレギオンからもらったのに、同じだけのものを私はレギオンに与えられていたのだろうか。
そんな問いばかりが浮かんでは悲しいことに自分自身で否定を繰り返す。
「……レギオン」
重い重い沈黙を破った私の声は、今にも消えてしまいそうなくらいに小さい。
「謝るなよ」
ごめんなさい、と紡ごうとした声はレギオンのそんなセリフに阻まれる。驚いて目を丸くすると、ゆっくりと顔をあげたレギオンが苦笑した。
「……そう言いそうな気がしたんだ。謝るなよ、マリーツィア。あの森からおまえを連れ出したのも、連れ出すと決めたのも俺なんだからな」
「でも」

「でもじゃない」
きっぱりと言い切られて私は言葉を飲み込む。
レギオンは優しい顔のまま、その優しいてのひらで私の頬を撫でる。
「もう少し、自分勝手になれ。自分本位になれ。おまえは、そのくらいでちょうどいいよ」
どうして、と私は呟こうとした。私はずっと一人きりで、そしてこうしてレギオンと共に過ごすようになって――随分と我儘になったと思うのに、それでも足りないというのだろうか。
そう呟こうとした、その瞬間に、目の前に綺麗な紫の瞳があった。吸い込まれるように見つめていると、次第に視界がぼやけて――唇にぬくもりを感じた。
ほんの一瞬、触れただけで唇は離れた。
「おまえが言ったんだろ」
無骨な指先がさっき触れたばかりの唇をそっと撫でた。
「俺に出会えたことが、幸運だって」

『たぶんレギオンに出会えたことが、私の人生で最大の幸運だよ』

そう――あの森を出たその日に。
私は今と同じようにレギオンにキスしてそう言った。別に行為自体には深い意味なんてなかった。感謝の意を表すには一番だ、なんて誰かが言っていたから。もう随分と色褪せてしまった母親の記憶の中にあった口付けは、甘くてくすぐったくてとても嬉しいものだったから。
……なら、今のは？
「レギ、」
「レギオン！　いるかい！？」

私の言葉は突然のマダムの声に遮られた。扉の向こうから慌てた様子が伺える。
「どうした」
レギオンが暗闇の中だというのに迷いなく立ち上がって、扉へ向かう。その背中をぼんやりと見つめながら、自分の唇にそっと触れる。

「ラナを見なかったかい！？　あの子買い物に出て帰ってきてないみたいなんだ！」
切羽詰まったマダムの声で、現実に戻る。フラッシュバックのようにひとつの光景が目の前でちかちかとした。
――夕暮れの中、広がる小さな血の海。
「……いつからいない？」
レギオンの冷静な声が混乱し始めた私の脳に響いた。
今この街では白っぽい髪の、緑色の瞳の人が、誰かに狙われている。
「夕方前にね、すぐ帰ってくるって出かけたんだよ、だけど」
「分かった」
レギオンはそれ以上の説明を必要とせずに、踵を返して部屋の中にある剣を手に取る。
「杞憂で終わればいいんだけど、でもあんなことがあったばかりだから」
マダムは心配そうに呟く。レギオンは無言で頷いて――そして私を見た。
「部屋から出るなよ。いいな」
私は頷いたのだろうか。
現実に戻った思考のままでも、上手く動けない。レギオンはどこに行くの。ラナさんはどうしたの。マダムはどうしてそんな顔しているの。

ぱたん、と扉が閉ざされて、部屋に闇が戻る。
「レギオン」
一人きりになってから、ようやく私は口を開いた。
私の声に応える人はいない。私は暗い部屋の中にただ一人置き去りにされて、途方に暮れるしかない。
「レギオン」
身体が震え始めた。
声も震えている。
ぽたりと瞳から水滴が落ちて、私の手の甲の上で跳ねた。

わたしのせいだ。わたしがわるいんだ。わたしが、さいやくのおとめがいなければ、ラナさんはあぶないめになんてあわないかったのに。わたしがいるからわるいんだ。ほんとうはわたしがころされるはずなのに。わたしがしねばいいのに。

子供みたいにそう呟いて、そして涙を拭う。
窓の向こうの空にはか細い三日月。

「――――ごめんね、レギオン」
ぽつりと呟いて私は扉に手を伸ばした。

例えば私に罪はないのだとしても。
私が、『災厄の乙女』だった過去は変わらないと思うんだ。

レギオンに出会えたことは、私にとって幸運だったよ。
今までの人生なんてどうでも良かったと思えるくらいに、あなたの存在は私の中に光を与えた。
レギオンがくれる優しさも、ぬくもりも、言葉も、風景も、選択

も、何もかも、私にとっては幸せに繋がる尊いものだったよ。

夜の街は甘い香りが強い。
しかし一度路地裏に入ると、人気もない。賑やかな雰囲気から仲間はずれにされたみたいに不気味な風が吹いていた。
その風に紛れて、血の匂いがした。
夜の街の喧騒に紛れるように、悲鳴のような声が聞こえた。
夕方のあのときは、一瞬で一人の命が散った。
そう思いだして背筋がぞくりとした。何かに導かれるように私は路地裏を進み、徐々に声は大きくなっていったことに安堵する。
「――――！」
抵抗する女性の声にはやはり聞き覚えがあった。
早く、早く、と足はどんどん駆け足になり――そして行き止まりのようなその場所で、私はその人を見つけた。
「死ね、死ね、死ね。災いの元凶め。おまえが生きているから、おまえがいるから人々は救われないんだ」
「ふざけてんじゃないわよ、このっ――！」
そう言いながら抵抗したラナさんの頭上に、剣が振りかざされる。
「――何してるの」
その瞬間に、自分でも驚くような凛とした声がその場に響いた。剣が空中でぴたりと止まり、狂った目が私を捕える。
「マリー！？　何してるの！？　早く逃げなさい！」
ラナさんが私に驚きながらも逃げろと叫ぶ。その声に私は首を横に振った。だってこれは、私は負うべきもののはずだから。
剣を振り上げたままの男はどこか焦点の合わない瞳で私を舐めるように見る。その視線にぞっとしながら、一歩前に踏みよる。
「――災厄の乙女を殺したいんでしょう？」

私は無理やりに笑みを作りながら言う。
「白き髪に、深緑の瞳を持つ娘を。……その人は災厄の乙女じゃないわよ」
胸に手を当てて、挑発するように笑う。
振りかざされた剣がゆっくりと下ろされ、ラナさんの手を掴んでいた手が私へと伸びてくる。
そう、それでいい。
「災厄の乙女は、私だもの」
さぁ、殺すなら殺せばいい。
そしてこの不幸の連鎖を断ち切るんだ。

１０：想いはすれ違い傷つけ合う

――――ねぇ、レギオン。

この世に「災厄の乙女」はいないと貴方は言うけれど。
でもね、やっぱり私は「災厄の乙女」だったんだよ。

どうしても、どうしても。
『私が生まれてきていなければ』って、思ってしまうんだ。

それがレギオンと出会えたことを否定することになると思っても。
だって、私がいなければレギオンはまるで違う道を歩んでいたんだろうなって、考えてしまうから。妹さんと幸せに暮らしていたんだろうなって。
私は結局、人から奪うだけの存在なんだ。

だから、ごめんね。

そういう悲しさは、全部私が持って行くから。
怒らないでね。
そして、泣かないでね。泣くくらいなら怒ってくれていいよ。

……ありがとう。

振り上げられた剣なんかに怯えたりはしない。
ただ静かに目を閉じて、世界の終わりを待った。
「マリー！！」
ラナさんの声が聞こえる。
優しくされることに慣れていないから、結局距離を掴めないままだったけど、綺麗な服を着せてくれて、お化粧をしてくれて。お姉さんって、こういう感じなのかなって、少し思ってたんだ。
その人を守れるなら、こんな死に様も悪くない。
不幸の象徴だった私が、誰かを守って死ねるなんて、誰が想像するだろう？
「しねえええええええぇぇぇぇ！」
汚らしい叫びも、今の私には哀れにしか聞こえない。この人も「災厄の乙女」に踊らされた可哀想な人なんだと思っているから。
レギオン、と小さく呟いた。
「――――……」
溢れる想いを伝えるだけの言葉を知らない私は、それ以上は何も言えなかった。
「いやあああああぁぁぁぁぁぁぁ！！」
張り裂けそうなラナさんの悲鳴が耳を貫いた。
悲しむことはないのに、と冷静な自分が心の片隅で思う。こうなる運命だったんだって、私は諦めがついているのに。

「マリーツィア！」

不意に、慣れた低い声が私の意識を引き戻した。
閉じていた瞳を開けると、剣を握りしめたレギオンの姿があった。
「レギ、オン」
覚悟は決めていたはずなのに、急に泣きだしたくなった。レギオンの姿に心の底からほっとして、諦めたはずの未来に手を伸ばした

くなる。
「邪魔するなあああああああ！」
駆けつけてきたレギオンを睨みつけながら、振り上げられた剣が振り下ろされる。それが不思議なくらいにゆっくり見えて、ああこれは無理だと頭の中で思った。
「ふざけるな！」
鋭いレギオンの声に、びくりと身体が震えた。
瞬く間にレギオンは私と通り魔の男へと詰め寄り、息をする間もなく力強いレギオンの剣筋が男の剣をはじく。
キィン、と少し耳障りな音が響いて、力なく男の剣が地に落ちた。
そして私を背にかばうように男と私の間に立って、男の喉笛を狙った剣がぴくりとも動かずに突き付けられていた。
「そんな奴がいるからいけないだから俺は不幸なんだどうして俺だけがこんな目にあわなくちゃいけない俺は悪くない俺は悪くない俺は悪くない俺は悪くない俺は悪くない悪いのはさいやくのおとめだ」
もう正常な意識なんてないのかもしれない。男はぼそぼそと呟いて、見開いた目で私を睨み続ける。目の下には隈ができていて、虚ろなその目に背筋がぞっと凍りついた。
「災厄の乙女なんていない」
厳しいレギオンの声が男を一喝する。
切っ先が浅く男の喉を切り裂いた。
「あんたはただ、災厄の乙女という幻想に狂わされただけだ」
その声は、憐れみを含んでいた。たぶんレギオン本人も、「災厄の乙女」と呼ばれるものに踊らされ、人生を狂わされた人だからだろう。
「あ、は、はははははははははははははは」
男は狂った笑みを浮かべたままその場に膝をついた。レギオンは剣を突き付けたまま、眉間に皺を寄せてその男を見ていた。

騒ぎを聞きつけた騎士団が駆けつけてくるまで、それほど時間はかからなかった。
男は騎士団に連行されたが、たぶんまともな受け答えは出来ないだろう。
「マリー！」
ラナさんが泣きながら私に駆け寄り、そして強く抱きしめてくる。
「あんたって子は！　なんて無茶をするの！　死ぬとこだったのよ！！」
耳元で聞こえる声は真剣そのもので、私を包み込んでくるぬくもりは偽りじゃなくて、これでもかというくらいにぎゅっと私を抱きしめる。
「……ごめんなさい」
たぶんこう言うのが正解なんだろうと、私は小さく呟く。
どうしてこんなに心配してくれるんだろうという気持ちも少なからずあって、戸惑うことしかできない。
「もういいわよ！　無事で良かった……！」
泣き声混じりにラナさんはそう言う。
離してくれそうもないラナさんに困惑しつつ、レギオンを見ると目が合った。
ただ静かに私を見下ろしてくるレギオンは、何も言わない。紫色の瞳が、今は何故か少し怖いと思った。どうしてだろう。
「……マリーツィア」
低い声が、いつものように私の名前を呼ぶ。
「……はい」
思わず身構えながら答えると、ラナさんも雰囲気を察したのか、おずおずと私から離れる。ぬくもりが遠のいて、少し寂しい。
俯き気味にレギオンを見上げると、彼は容赦なく私の頬を叩いた。
乾いた音が響いて、気がついた時には私は横を向いていた。右の頬がひりひりとして、一瞬何が起きたのか分からなかった。
「――――死ぬつもりだったな？」

甘えを許さない声がなおも私を責め立てる。
茫然としながら右の頬を抑えて、レギオンを見上げる。冷たい紫色の瞳が無感情に私を見下ろしていた。
「……だって」
そうするのが一番だと思った。
そうすれば皆が幸せになれると思った。
じわりと涙が滲んできて、だって、と子供のように繰り返した。
いつも私を助けてくれるレギオンが、今は私を責める。
「俺は言ったよな、部屋から出るなと」
冷たい声に、涙がぽろぽろと零れ落ちる。
どうして？　せいいっぱい考えて、これがいちばんだって思ったのに。
「おまえは俺に何も言わずに、俺に何も言わせずに、黙って死ぬつもりだったわけだ」
だって、それは。
何度も口を開いて説明しようと思うのに、上手く動いてくれない。ぱくぱくと空回りするだけで、声になってくれない。
「おまえにとって、俺はその程度の人間だったってことか」
それは苦しそうで、悲しそうな声で。

違うよ、そんなわけないよ。
大切だよ。私なんかよりずっとずっと大切だよ。

そう言いたいのに声は声にならない。
「だって！」
言い訳のように何度も呟いた言葉がようやく張り付いていた喉から離れた。
「放っておけなかったんだもん！　私が災厄の乙女だから、そのせいで誰かが死んで、そのせいでラナさんが危ない目にあっているのに、それを無視して守られてるのはなんか違うって、そう思ったん

だもん！　他の誰かが傷つくなら、いっそ私が傷ついたほうがいい！」
「ふざけるな！」
空気さえ切り裂くようなレギオンの声に、私はびくりと身体を震わせる。
「おまえなら傷ついてもいいなんて、そんなこと思うな！　あんな状況見せつけられて、俺の寿命がどれだけ縮んだと思ってるんだ！　誰かを守れるほどの力もないのに、一人で動こうなんて考えるな！」
チッ、とレギオンは舌打ちすると、そのまま背を向けて行ってしまう。
「レギ、」
その背中を追いかけようとすると、止められる。驚いて振り向くと、ラナさんが静かに首を横に振った。
「少し一人にしてやんなさいな。それにそのほっぺ、冷やさないと明日ひどいわよ？　レギオンも少しは手加減しなさいよって、ねぇ？」
苦笑しながらラナさんの綺麗な指が右の頬に触れる。指先が触れた瞬間にずき、と鈍く痛みを訴えてきた。
「手当てして、それから部屋に戻りなさい。それからで遅くないわ」
そう言われて優しく手を引かれる。私達の後ろには何も言わずに騎士団の人が付いてきた。一応護衛なのだろう。
すぐに館に着いて、ラナさんはそのまま部屋へと私を連れていく。マダムは私の腫れた顔を見て「やれやれ、しょうのない奴だね」と呟いた。レギオンは先に帰ってきているらしい。

「そこに座りなさい」
言われるがままに椅子に座ると、冷やしたタオルが頬に当てられる。

「！」
ひんやりとしていて気持ちいいけれど、少し痛い。
「これくらいは我慢しなさい。心配させた罰よ」
ラナさんは優しくそう言いながらタオルを私に押し付ける。
「……レギオンも、心配したのよ。ねぇ、マリー、考えてみて。今日あなたがしたことを、レギオンがしたら、あなたはどう思う？」
「どう、って」
死ぬつもりで、何も言わずに危険な場所に飛び込む？
――もしかしたら、二度と会えないかもしれない？
触れ合うことも、声を聞くことも――できなくなる？
「……やだ」
止まっていた涙がぽろりと落ちる。
レギオンを失うなんて、そんなこと考えるだけでも恐ろしい。
「つまりは、そういうことよ。レギオンもあなたと同じように思ったってこと。悪いことをしたってことは分かったわね？」
諭すようなラナさんの声に、何度も何度も頷く。
それなら、ちゃんと謝りなさい。そう言ってレナさんは笑った。
動こうとしない私の手を引いて、そして背中を押して部屋から出される。

途方もなく長く感じる部屋までの道のりをゆっくりと歩いて、扉の前にじっと立ち止まって立ちつくす。
たった一枚の扉が、どう足掻いても越えられない壁のように大きく感じた。

11：選び取るものひとつ

しばらく扉の前に立ちつくしたあと、意を決してかちゃ、と静かに扉を開けると部屋の中は暗いままだ。
「……レギオン？」
おずおずと部屋の中に入り、声をかけるけど返事はない。
静かに部屋の中に入って行くと、レギオンは扉に背を向ける形で――私に背を向ける形で、長椅子に横になっていた。
――寝ている。……そう言いたいんだろう。
「レギオン」
もう一度呼ぶけれど、やはりレギオンは答えない。
ゆっくりと長椅子へと歩みより、膝をついてレギオンの背中に縋りつく。
「ごめんなさい」
広い背中に額を押しつけて、泣きだしそうになるのを堪えながら何度も何度も「ごめんなさい」と呟く。

これが最善なんだって、そう思ったけど。
でもそれは、レギオンを傷つけたんだね。
そんなことにも気づけないほど私は愚かだったんだね。

「……ごめんなさい」

自然と流れ出した涙は静かに落ちて跳ねる。
どれだけそうして、何度「ごめんなさい」と繰り返したか、分からなくなるほど長い時間が過ぎて、ただ縋りついた背中から、たぶんレギオンは眠っていないんだろうということだけが察せられた。

気がつけば、私は眠ってしまっていたようだった。
目を開けて一番に目に入るのは未だに慣れない天井。
目の周りはどこか腫れぼったくて重たい。どうしてだろうと原因を考えて、昨夜の出来事を思い出して私は飛び起きた。
「レギオン！」
まさか置いて行かれたりはしないだろうか――そうされても何も言えないほどのことをした、その自覚が今はある私にとっては不安でたまらないことだった。
「起きたか」
そんな私の不安を吹き飛ばしてしまう、レギオンの声。
レギオンはいつもと変わらぬ様子でベットに歩み寄ってくる。心のどこかではレギオンが私を置いていくはずもないと思いながら、本当にそうだったから驚いて茫然とする。
「やっぱり腫れてるな。冷やした方がいいぞ、それ」
こっちの方がましなくらいだ、とレギオンはそっと手の甲で私の右頬に触れる。昨日レギオンに叩かれたんだったと思いだすけれど、あまり痛みはなかった。やっぱり加減されていたみたいだ。
「……レギオン」
「待ってろ、タオルでももらってくる。そんな顔で外に出られちゃ、何したんだって俺が問い詰められそうだしな」
「レギオン！」
何かを誤魔化すように早口で話すレギオンの背中にしがみ付く。
どこにも行かないでほしい。傍にいてほしい。そんな言葉を口に出すのは簡単なはずなのに、喉に張り付いて離れない。

「ごめんなさい。ごめんなさい！」
昨夜数え切れぬほど言った言葉をもう一度、心の底から吐きだす。
「レギオンのことがどうでも良かったとか、そんなこと絶対にないから、絶対絶対ないから！　私は私のことよりレギオンの方がずっと大事だから！」
また溢れだした涙を堪える余裕もなく私は叫ぶ。
「だから、ごめんなさい」
ぎゅ、とレギオンの服を握りしめると、ふぅと小さくレギオンがため息を吐きだしたのが聞こえた。
「それなら、もう何度も聞いた」
呆れたような声に、やっぱりレギオンは起きていたんだと思う。
「……おまえが、過去を切り捨てられない気持ちは分かるつもりだし、他人のために動こうと思い始めてることは悪いことじゃないんだろう。だけどな」
少し怒ったような声に、私はただ息を呑んで黙る。ひときわ低くなった声に一瞬だけびくりと怯えてしまった自分の身体を情けなく思いながら、それでもレギオンの側を離れるまいと服の裾を握りしめた。
「おまえがおまえ自身を軽んじるな。そんなこと誰も望まない」
顔は見えないままだけれど、どこか優しさを含んだその声に、涙を飲み込む。
「……やくそくする」
かすれた声でそう答えると、レギオンが笑った気配がした。一瞬にして空気が柔らかくなって、ほっとする。
「今日出るぞ。挨拶して来い」
レギオンはゆっくりと振り返ると、私の髪を撫でてそう笑う。
ああ、もうお別れなんだ。
そんな感想がぽつりと浮かんだ。どうしてだろう、とても短い間

だったのに、とても凝縮された日々だった気がする。挨拶するのもマダムやラナさんくらいしかいないけれど。
「わかった。……レギオン」
服の裾をくいっと引っ張ると、レギオンが「どうした」と言いながら身を屈める。
つま先立ちになって、そっと唇を寄せる。体勢に無理があったのか、ほんの少しかすめるくらいのキスにしかならなかった。
すぐに離れた唇が、少しだけ寂しさを残すようにぬくもりを主張する。
「……おまえな」
「なぁに？」
首を傾げて問うと、レギオンがはぁぁぁ、と長いため息を吐きだした。ただ感謝のつもりだったんだけど、間違ったのだろうか。
「キスの意味くらい覚えとけ」
「意味？」
レギオンが私を引き剥がすように私の頭に手をおいて、腕を伸ばす。まるで近づけなくなって、私は訳がわからない、と呟くとレギオンはますます渋面した。
「そう気軽にするなって言ってるんだよ。……もういいから、挨拶して来い」
「……レギオンは？」
来ないの？　と聞くと犬猫を追い払うように手のひらを振られる。
「もう済ませた。準備したら俺も行く」
「すぐに出るの？」
目が覚めたばかりなんだけどな、と思うとレギオンは明るい窓の外を見て頷く。
「昨日あんなことがあったんだ。面倒になる前に出立した方がいい」
――あんなこと、というのはあの悲しい事件のこと。面倒なことは――私が『災厄の乙女』だと知られること、なんだろう。
「分かった」

納得できるから素直に頷いて、手早く身支度を整えると部屋から出る。朝だけど、ラナさんやマダムは起きているだろうか。

一階のホールに行くと、マダムとラナさんは私の姿を見つけて微笑んだ。

その優しい顔になんだか嬉しくなって駆け寄ると、マダムがそっと手を伸ばして頭を撫でてくれた。

「聞いたよ。行くんだってね」

ほんの少し寂しさを滲ませた声に、少し泣きそうになって「はい」と答えた。

「短い間でしたが、お世話になりました」

ぺこりと頭を下げると、気にすることないのに、と笑う声が聞こえた。

「……マリー」

深刻そうなラナさんの声に、私は顔を上げる。ラナさんは少し困ったように――それでも優しい顔で微笑みながら私をまっすぐに見ている。

「あなたがどんな存在であったとしても、私達にとってはただのマリーよ」

「……ラナさん」

気づいて、なんて言葉は無粋だろう。ラナさんを守る為に私は自ら『災厄の乙女』を名乗ったんだから。でももしかしたら、ずっと前に気づいていたのかもしれない。

「私はこの国から出ないし、この街で生きていくと思う。けどね、それは幸せになることを諦めているからじゃないから。それは覚えておいてね」

「わたし、」

何を言おうとしたのか分からない。けれど何かを紡ぎ出そうとして失敗した。
込み上げてきた涙が言葉を作ろうとする私を邪魔する。

「マリーツィア」

何か、何かを言おうとして口籠もる私をレギオンが呼ぶ。
振り返ると、荷物を持ったレギオンが私を待っていた。
「時間だね、おいき」
マダムが優しく背中を押す。それでも一歩を踏み出せずにいると、ラナさんが笑って一枚の紙を私の手に握らせた。
「ここの住所よ。暇な時にでも手紙をくれたら、嬉しいわ」
「え、でも……私、文字書けないです」
ついこの間まで読むことも出来なかったのだ。今だってレギオンの手伝いがなければ文字を読めない。少しずつ教えてもらってはいるけれど――
「なら、なおさらよ。いい練習になるでしょう？」
ラナさんはにっこりと笑って、そしてマダムと一緒に私の背を押す。
後ろ髪引かれながらもレギオンのもとへ行くと、レギオンは目だけで「もういいのか」と問うてくる。

――私がこの地を踏みしめることは、もうないだろう。
つまりそれは、二人とはもう二度と会えないのだということだ。
差し出されたレギオンの手をとり、静かに私は頷く。

私はもう――選んでいるんだ。

唇を噛み締め、ホールの真ん中に立ってこちらを見ているマダムとラナさんを振り返る。優しい笑顔に涙がこみ上げてきたけれど、

それを必死で飲み込んだ。
「さよなら！　ありがとうございました！」
二人の笑顔に応えるように、精一杯の笑顔で私は手を振る。

私はこの繋いだ手をもう離さない。
どれだけ傷つけようと、傷つけられようと、それでも私はこの手を選ぶ。

これから続く旅路の中で、私はたぶん多くのものに出会って、そして別れを迎えるんだろう。
それでも、最初に選んだこの人とだけは別たれる日が来ることがありませんように。

王都の中の夜の街を照らしだす太陽の光に目を細めて、私は青空を見上げる。

眩しい、旅の始まりだった。

１１：選び取るものひとつ（後書き）

これにて「グリンワーズの災厄の乙女・王都編」完結です。
ご愛読ありがとうございました。
これから続く二人の旅路を祈りつつ、ひとまずのお別れです。

ご意見、ご感想など一言でもいただけると幸いです。
最後までお付き合いありがとうございました。

青柳朔

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4359h/

グリンワーズの災厄の乙女【第二部・王都編】

2011年3月8日00時26分発行